

## 1P151

## COVID-19流行下に経験した終末期小児がんの一例

林美帆、山中純子、下澤克宜、山中暖日、  
渥美ゆかり、鈴木優里、高砂聡志、田中瑞恵、  
瓜生英子、齋藤美姫、渡辺麻野子、柳澤麻奈美、  
七野浩之

国立国際医療研究センター

## 【背景】

小児がんは治癒が見込める病気となったが、難治例では緩和医療を必要とする。COVID-19流行による社会的行動制限下で我々は多職種の支援を受けて感染防御を行いつつ、積極的な緩和医療を行った終末期小児がんの一例を経験した。

## 【症例】

3歳時に高リスク神経芽腫を発症し、集学的治療を行い寛解した。4歳6か月時に再発し病勢は増悪し、6歳で緩和医療へ移行した。多臓器転移による疼痛、呼吸苦、嘔吐などの治療および患児のQuality of Life (QOL) の積極的維持を目的に入院での緩和医療を行い6歳5か月で永眠した。

## 【終末期経過】

COVID-19流行により家族の面会や外泊制限あるいはプレイルーム使用などの病院内での強い行動制限により6歳男児と母は個室に生活の場を制限され終末期にも関わらず心身共に孤立した。死にゆく子どものQOLを維持向上するために病院内外の多くの人々の支援を活用して積極的終末期医療を行った。チャイルドライフスペシャリスト、保育士、心理師、医師、看護師、薬剤師など多職種による遊びや学びの支援を強化した。外泊が許可された際はPCAポンプによるオピオイド持続点滴や救済投与方法を用いて可能な限り安楽に自宅で過ごせるようにした。児の希望を叶えるため慈善団体の協力を受け、医師も同伴し、厳格な感染防御態勢を敷いて、レゴランド体験や羽田空港でのコックピット操縦体験などを行った。またオンラインによる入学式など家族とともに児の成長を実感できる機会を設けた。通学ができなかったため郵送での宿題のやりとりなど学校との交流を最期まで継続した。また姉は弟の病状を心配しつつも不安や孤立感を抱えており、手紙を通してきょうだい支援を行った。

## 【考察】

「家族と過ごす普通の日常生活や外出や旅行など家族とともに楽しめる機会を経験する」、「不安や苦しみを軽減できるよう患児やきょうだいの発達にあった心理的・医学的サポートを心掛ける」、「自分の成長発達を患児自身が自覚し、喜びを家族と共有する」ことが終末期医療の目的である。COVID-19流行による行動制限下では、患者や家族と医療者間のコミュニケーションの維持が容易ではなく、医療の基本である寄り添いや社会支援が制限され、十分な終末期医療の提供は難しい。我々は多職種連携と感染防御を厳格に行うことで積極的に終末期の患児と家族のQOLの向上を図ることができたと考える。

## 1P152

## 自閉スペクトラム症の親子相互作用に関する文献レビュー

長志保<sup>1,2</sup>、牛腸昌利<sup>1</sup>、藤本幹<sup>1</sup>

<sup>1</sup>国際医療福祉大学小田原保健医療学部作業療法学科

<sup>2</sup>国際医療福祉大学大学院保健医療学専攻作業療法学分野

## 【はじめに】

子どもの言語レベルと親の反応性の双方向の影響をサポートする必要性が報告されている。さらに、自閉スペクトラム症（以下ASD）児と親の相互作用に関する研究は、近年増加傾向にある。本研究では、ASD児と親の相互作用に関する研究動向を探り、本研究で得られた知見を作業療法へ応用することを目的に文献レビューを行った。

## 【方法】

検索データベースはPubMedを使用し、検索ワードは「"interaction"AND"parent-child"AND"autism spectrum disorder」とした。調査対象は近年10年間とし、2020年6月に検索を実施した。ASD児と親のやりとりの国内文献レビューに関する先行研究を参考に、「親」「子」「親子」「その他」の4種類に分類した。「親」は親自身に着目した文献、「子」は子ども自身に着目した文献、「親子」は親子のやりとりや関係性に着目した文献であり、当てはまらないものを「その他」と設定した。最後に、親子のやりとりの場面についても分析した。

## 【結果】

調査対象となった文献は597件であり、「親」が175件、「子」が272件、「親子」が99件、「その他」が51件であった。「親」はさらに「親の経験や気持ち」と「育児の現状と支援」に分類され、それぞれ36件、139件であった。「子」は「ASD児の特徴や反応」と「ASD児の主観や体験」に分類され、266件、6件であった。「親子」は「親子のやりとり」と「その他」に分類され、81件、18件であった。「親子のやりとり」の内8件が日常生活場面における研究であった。

## 【考察】

親子の相互作用に関する研究は近年増加傾向であるが、親または子のどちらかに言及した研究が多かった。また、親子双方に着目した研究の大半が構造化された場面で行われていた。発達障害の評価視点として、「対象児がどのような人的・物理的環境においてどのような能力を発揮して生きているのか」が重要であり、母子の日常の自然な関係を把握できなければ支援に役立てることが難しいとも言われている。そのため、今後は日常生活場面における親子の相互作用について着目し、作業療法士がASD児と親の支援に活かせる知見を得る必要がある。